

## こちら特報部

## 感染症医ら店など回り個別指導

新型コロナウイルスの感染が、再び爆発的に拡大しつつある。政府の支援事業「Go. To. イート」などで客足が回復しつつある飲食店は、手探りの感染対策が続くが、政府が発信するのは「三密の回避」や「新しい生活様式」など抽象的な文言ばかり。そんな中で、各店を回って具体的な対策をレッスンする医師と専門家がいます。誤った対策を続ける店も多いといい、ウイルスの特性を理解する必要を訴えている。

(大平樹)

失敗しない  
コロナ対策

「誰が触ったか分からない紙ナプキン立てはなくて、店員が一枚ずつナプキンを出すようにした方がいい」。横浜市青葉区のカフェ「Rin5 Life (りんごらいふ)」。店内を見て回った医師の岩室紳也さん(みよむら)が、オーナー店主の佐藤真優子さん(まゆみ)に優しく語りかけた。

数に限りがある手指消毒液のポンプをトイレの近くに置く。か悩む佐藤さんに対して、岩室さんは「お客さんが食べ物を入れる直前の消毒が効果的です」と助言。客が席に戻ってから店員が消毒液を持って行くか、個別包装のアルコール入りおしぼりを客席に置くことを勧めた。多くの人が使うトイレでウイルスが手に付くことは避けられなくても、各自が食事直前に消毒すれば感染リスクを下げられるからだ。

公衆衛生と感染症が専門の岩室さんは、佐藤さんがエーロゾル(浮遊粒子)感染を防ごうと天井から取り付けたビニールカーテンに



①佐藤さんにも机の拭き方などを指導する岩室さん  
②いずれも横浜市青葉区で受講した店に配っている缶バッジ

## 消毒液の場所から最適な換気まで

ついても「かえって空気の流れを妨げてしまふ」と指摘。外す代わりに、換気扇を常時回すことで空気の流れをつくるように呼び掛けた。「入り口のドアも開けておいた方がいいんでしょか」と聞く佐藤さんに「冬は寒いでしょう。この換気扇なら十分に空気の流れをつくれるから不要です」ときっぱり。

新型コロナウイルスは、つばなどの飛沫、吐く息に含まれるエーロゾル、人同士が直接触れたり触った物を介したりする接触感染で拡大する。粒が大きい飛沫は二メートル以上飛ばないとされる。細かいエーロゾルは長い時間、遠い距離まで漂う一方、空気の流れて拡散させれば感染リスクが下がる。それぞれ取るべき対策は異なってくる。

岩室さんの指導は、各店の設備や状況に応じて、感染リスクを下げる具体的な対策を提案するのが特徴。佐藤さんの店では、グループ客に出す取り皿を、会話でつばの飛沫がかららないように机の中心から遠いところに置くことや、デザートにも取り分け用のフォークを付けることなどを勧め

た。客が食事を終えた後の机の拭き方など細かい点にも及んだ。

自身が感染して客に拡大させないように気を付けている佐藤さんだが、知らずに感染している客が店に来る可能性はある。他の客に拡大しないようにと対策を取ってきたが、本当に正しいのか不安があった。約一時間のレッスン後、受講済みを示す缶バッジを受け取り「こういう時はこうする、というやり方が見えてきた」と笑顔を浮かべた。

「飲食店は客を呼ばないとやっていけない。三密を避ける、と言われるだけでは、具体的にどう対策したらいいかわからない店もある」。岩室さんと共にレッスンに取り組み、株式会社リテラジャパンの西沢真理子社長(まこと)が語る。

西沢さんは、物事に潜むリスクを一般向けに分かりやすく説明する「リスクコミュニケーション」が専門のコンサルタント。省庁の専門委員を務めたほか、二〇一一年の福島原発事故では福島県飯館村から依頼を受け、避難した村民に放射線の影響を説明した。

こちら特報部

ビニールカーテンやフェースシールド…

使い方に「それダメ」散見



コロナウイルスの特性について、佐藤さん(手前)に説明する西沢さんと岩室さん

レッスンを始めたきっかけは、春に新宿・歌舞伎町などで相次いだ、ホストクラブやキャバクラでのクラスタ(集団)感染だった。テレビでは感染者の発生情報と共に、ネオンがまたたく歌舞伎町の映像が繰り返し放送された。小池百合子東京都知事ら政治家も「夜の街」とひとくくりにして、立ち入り自粛を呼び掛けた。

西沢さんは、まるで街全体が悪者のような物言いに違和感を覚えた。「必要以上に感染の恐怖をおおるし、行かない人からの不毛なバッシングも招く。キャバクラには子どもを養うシングルマザーも多いが、そうした人たちの生活はどうなってしまふのか」。感染リスクを下げる対策を店に伝えることを思い立った。神奈川県厚木市立病院で外来診療を続ける岩室さんも、同じ問題意識を持っていた。知人を介して知り合った二人は六月、「夜の街

応援!プロジェクト」と銘打った無料の出前レッスンを開始。まずは、感染者が多く出た東京や横浜の繁華街を回った。同性愛者が多く集まる東京・新宿二丁目のレスビアンバーでは仲間意識を高めるためか、たばこの回し飲みが行われていた。接触感染のリスクが高いため、やめるよう勧めた。

対応に戸惑う多くの店の目の当たりにして、ニーズを感じた。八月からはクラウドファンディングサイトの運営会社から助成を受け、「夜の街」に限らず活動範囲を広げた。客足が鈍った郊外の飲食店やクリニック、福祉施設などで、十一月月上旬までに約四十件のレッスンを重ねてきた。西沢さんが気になったのは、目的や効果を誤解したまま対策を続ける店が多いこと。空気の流れを妨げるようなビニールカーテンの設置だけでなく、マスク代わりに使われるフェースシールドも、誤った使い方をしている店があるという。シールドは正面への飛沫を防げるが、マスクと異なりあごを覆っていない。調理する店員が着けると隙間から落ちた飛沫が料理にかかるおそれがある。効果が小さいのに着けることで「対策している」という気の緩みにもつながる。「対策は何のためなのか把握しなければ、意味がないどころか逆効果になる」と警鐘を鳴らす。

国は掛け声ばかり 「正しい取り組み必要」

岩室さんには「感染症専門医として社会に基本的な予防策を伝えることを怠ってきた」と自戒の念もある一方で、「政府や自治体は三密を避けるように呼び掛けているが、言葉が独り歩きして具体的な対策につながない」とも感じる。「政府の有識者会議にしているのは国際的な感染症の専門家たち。素手で食事するのが普通の国も含めた国際基準と、はして食べる」とがほとんどの日本とでは、力を入れるべき対策が変わるのは当然」と、訪問レッスンの必要性を説明する。

秋以降、レッスン依頼は日を追うごとに増えている。西沢さんは「夏は経営に手いっぱい、対策まで気が回る店が少なかったのではないかと分析。今後にもさらに増えそうだろう。」

全国の新型コロナウイルスの新規感染者は十二、十三の両日に連続で千六百人を超え、いずれも過去最多を更新した。「正しい感染対策が広く伝わっていないのは明らかで、伝える側は反省するべきだ。それぞれができる対策を再確認して徹底することでしか、拡大の勢いを抑えられない」と岩室さん。

社会と新型コロナウイルスとの付き合いはまだ続くが、人と人が酒を酌み交わしながら会話を楽しむのは、健全な営みのはず。西沢さんは「私も店で飲むのが好き。リスクをゼロにはできないが、客が少しでも安心して行ける店を増やせるように手伝いたい」。二人の飲食店回りは続く。